

第20回学会発表のまとめ

ホネット承認論に対する批判と応答

王 燕敏（社会学研究科博士後期課程）

アクセル・ホネットはヘーゲルの「承認」概念を定式化した上で、諸個人が相互承認に基づいてのみ、自己実現へ至ることができると主張している。ホネットによって構築されたこの新たな承認論は、多くの学者に注目され、議論されている。本発表では、そうしたホネットの承認論に対して、ナンシー・フレイザー、アルト・ライティネンとハイキ・イケハイモが行った批判、そしてそれらの批判に対するホネットの応答を検討することによって、ホネットがいかにして自身の承認論を再定式化したのかを明らかにしようとして試みた。

そのため、報告者は、『再配分か承認?』の中でホネットがフレイザーに対して行った反論を読み解きながら、彼が『承認をめぐる闘争』に対して、修正した要素を検討した。まず、ホネットが、社会的な不正の根本な源泉を明らかにするために承認論的転回を行った上で、「再配分」を「承認」のうちに捉え、フレイザーの正義論を一元論であるとして批判していることを明らかにした。加えて、ホネットは、イケハイモ、ライティネン等との議論を通して、「承認」概念を反応行動として再解釈し、カントの尊重概念を用いながら、社会的な承認を道徳的な義務と結びつけることで、「主体が自律性を発展させていく条件」として考えていたことを示した。これは、社会的な「承認」が倫理的な意味を持つことを示唆するものである。さらに、以上の修正に加え、ホネットは承認の闘争を対象関係論、欲動理論と結びつけることによって、適切な承認の闘争の根拠を探っていたのであり、この点についても考察を行った。そして、最後に、彼がい

かにして自身の承認論を「人間学、社会理論、政治学との相互作用」によって生じた論理として捉え直し、それを規範理論として提示しようとしていたのかを明らかにした。

本発表に対して、まず、進歩思想と価値实在論に関する質問をいくつかいただいた。質問に対して、報告者は、ホネットが穏健な価値实在論を選んだ上で、価値实在論に進歩思想を植え付けることを簡単に述べたが、価値实在論について説明することができなかった。また、この点に関して、欧米の研究者たちの価値实在論と比較する提案をいただいた。こういった提案から他の価値实在論と比較するならば、ホネットが修正した承認論を解釈することについて、新たな可能性が出てくると考えられる。

次に、ホネットがフレイザーを複数主義ではないと批判したことを本発表では扱ったが、その点について、ホネット自身の立場などの不明確さについてご指摘をいただいた。また、フレイザーが『正義の秤』の中で改めて、正義を再配分、承認、代表という三つの次元に分けたことに対して、本報告内容がどのように対応できるかについて明確に答えることができなかった。

今後は、価値实在論を続いて考察し、フレイザーが改めて論じた正義論の検討も視野に入れて研究を進めることによって、以上で述べられた不十分な点を解決していきたいと思う。